Japanese association of educational psychology

PC 15

幼稚園児における対人葛藤解決の発達的変化
－入園年齢による差異－

利根川智子
（お茶の水女子大学人間文化研究科）

［目的］
幼稚園では3年保育（3歳入園）と2年保育（4歳入園）が行われている。本研究では、集団保育が開始される年齢の差異により葛藤内容、葛藤解決方略、解決結果などの差異を縦断的に検討する。

［方法］
1.対象児：1997年度に年中児クラスに在籍した3歳入園児と4歳入園児のそれぞれ男女各16名づつを対象とした。人数の内訳を表1に示す。

表1. 対象人数の内訳（単位：人）

		Ⅰ期	Ⅱ期
3歳入園	男児	16	16
	女児	16	12
4歳入園	男児	16	16
	女児	16	14

2.期間：1997年9月8日から11月28日（Ⅰ期：4歳児クラス）、は1998年10月15日から11月17日（Ⅱ期：5歳児クラス）。

3.手続き：対象児1人につき、15分間の観察が2回行われ、葛藤解決場面が生じた場合、カテゴリーに従いコーディングが行われた。

4.カテゴリー：本研究では、葛藤場面を「他者との関係において自己の欲求・要求・行動が阻害される場面と定義する。カテゴリーには、葛藤内容として、「物・場所」「身体的攻撃」「心理的攻撃」「遊びの中での役割」「秩序」の5つが、葛藤解決方略として「情動表出」「攻撃的・無視・報復」「拒否・禁止」「理由・代案」「他者依存」「回避的」の6つが、そして葛藤結果には「行為者の言い分」「被害者の言い分」「双方・うやむや」の3つが、用いられた。方略については、見られたもの全てがコーディングされた。

［結果と考察］
1.葛藤数：年ごとの葛藤数を表2に示す。両年とも、物・場所をめぐる葛藤が多い。入園年齢でみると、Ⅰ期では、身体的攻撃をめぐる葛藤が多く、遊びの中での役割をめぐる葛藤および秩序をめぐる葛藤は3歳入園のほうが多かった。Ⅱ期では、差異は認められなかった。

2.解決方略：①Ⅰ期　拒否・禁止方略を含む方略の使用では4歳入園児（48.12%）よりも3歳入園児（59.84%）の方が多く（χ^2=6.68, df=1, p<.01）、理由・代案方略を含む方略使用は4歳入園児（25.52%）よりも3歳入園児（43.44%）の方が多かった（χ^2=17.14, df=1, p<.01）。また、攻撃的・無視・報復方略を服務方略の使用では、4歳入園児（25.10%）よりも3歳入園児（76.57%）の方が多い傾向が認められた（χ^2=3.12, df=1, p<.1）。　②Ⅱ期　理由・代案を含む方略使用は4歳入園児（37.63%）よりも3歳入園児（47.09%）の方が多かった（χ^2=6.23, df=1, p<.05）。情動表出方略を含む方略使用は3歳児入園（35.17%）よりも4歳児入園（44.47%）の方が多かった（χ^2=6.50, df=1, p<.05）。

3.葛藤結果：①Ⅰ期　被害者の言い分が通ることでは、3歳入園児（63.11%）よりも4歳入園児（76.57%）の方が多く（χ^2=22.18, df=2, p<.01）、双方・うやむやで4歳入園児（17.21%）よりも3歳入園児（4.18%）の方が多かった（χ^2=22.18, df=2, p<.01）。　②Ⅱ期　双方・うやむやで4歳入園児（7.37%）よりも3歳入園児（13.08%）の方が多かった（χ^2=9.84, df=2, p<.01）。行為者の言い分を通すことは3歳入園児（23.84%）よりも4歳入園児(31.58%)の方が多かった（χ^2=9.84, df=2, p<.01）。被害者の言い分が通ることについては有意な差は認められなかった。

3歳入園児はⅡ期でも、葛藤相手に対して理由や代案を提示することが多いことから、相手と交渉していこうとする態度を伺わせる。仲間との葛藤において被害者である自分の言い分を通すことは3歳入園児も4歳入園児もほぼ同様の頻度であったが、他の解決結果差異が認められた。

表2. 入園年齢ごとの各年の葛藤数

	Ⅰ期						Ⅱ期					
	物・場	身体的	心理的	役割	秩序	小計	物・場	身体的	心理的	役割	秩序	小計
3歳入園児	130	42	28	15	29	244	159	70	67	21	27	344
4歳入園児	129	68	28	6	8	239	198	79	72	12	19	380
計	259	110	56	21	37	483	357	149	139	33	46	724

NII-Electronic Library Service